

聖書:使徒の働き13章42~52節

説教:神の恵みにとどまりなさい

はじめに

いつものように前回までのあらすじを振り返ってから今日の所を見てまいります。パウロとバルナバは、今のトルコのアンティオキアという大きな町にあるユダヤ人会堂に入り、福音を語りました。その内容は三つあります。一つ目、あなたがたユダヤ人たちが信じている旧約聖書には救い主が来られるとの約束が書かれている。二つ目、エルサレムの指導者たちは救い主として来られたイエスを救い主と認めず十字架に追いやり殺したけれど、神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださった。三つ目、律法を守ろうとしても義と認められることはできないけれど、イエスを信じる者は罪が赦され、みな義と認められる。この三つを語った。その結果どうなった。それが今日の箇所になります。

私たちも一人でも多くの人が救われて欲しいと願い、機会があればイエスの福音を伝えることがあります。反応は様々です。興味を示してくれれば嬉しくなりますが、露骨に嫌な顔をされたりすることもある。あるいは、最初は興味を示して聖書の学びまで進んでも、いつの間にか教会に来なくなる人もいて、そういうときは自分の伝え方がよくなかったのかと、がっかりすることもあります。パウロの場合はどうだったのか、見てまいります。

1 福音を聞いて

1) 語り合った

会堂にいた人たちは、パウロから、エルサレムに住んでいたユダヤ人がイエスを十字架に追いやったとか、死んだイエスが三日目によみがえったという話を聞きました。ユダヤ人にとってあまり嬉しい話しではありません。ですから、そんな話しは信用できないと反発されることだってあり得たと思うのです。ところが42節を読むと、人々が「次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼」むほど、非常に前向きな反応を示してくれました。そればかりではなく、多くのユダヤ人がパウロとバルナバについて来て、いろいろ質問してきた。それも批判的な質問ではなく、本当に信じてよいのかどうか、最後の一步を踏み出すために確認したくて質問したようなのです。パウロはそんな人々と語り合い、説得して神の恵みにとどまるようにと励ましています。

2) 町中の人たちが集まった

神の恵みとはなにか、そのことはまた最後に触れることにして、次の安息日、どうなったかを見てみましょう。44節。「次の安息日には、ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まって来た。」

ひとことでユダヤ人と言ってもさまざまです。毎週熱心に会堂に通う人もいれば、名ばかりの人たちもいたのでしょう。日本で言えば、お盆やお彼岸にはお墓参りをし、葬式は仏式ですが、ふだんはお寺には行かない。そういうのに似ています。そんなあやふやなユダヤ人も、この日ばかりは「主のことば」を聞くためにやってきた。主が備えてくださっている救いはどのようなものであるのか、自分たちはどうしたら救われるのか、死んだらどうなるのか、それを知りたくて来たというのです。これはどういうことか。おそらく彼らはずっと以前から、こころの深いところで求めていたのだと思います。けれども納得できる答えを聞くことができなくて会堂に行かなくなった。でもいまその答えを聞くことができるのではと、人々は期待して集まって来ました。

ユダヤ人だから特別熱心に求めていたと言うことではないでしょう。時代や国が違って、人の死や罪のことは誰にとっても深刻な問題なのです。ふだんは考えていないようでも、あるとき誰でも死の問題に直面するときにやってきます。そんなとき、ずっと人には言えないでいた罪の意識が思い出されて、苦しむときがある。それで納得できる答えを求めます。どこに答えることがあるか。人々はパウロが語る福音こそ求めていた答えであると気がつくのです。

2 迫害

1) ねたみに燃えて

このようにして、多くの人たちが信仰に入り、その地方全体に福音が広まっていきました。この伝道旅行は大成功です、と言いたいところですが、物事はそんな簡単ではない。45節。「しかし、この群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃え、パウロが語ることに反対し、口汚くののしった。」

なぜねたみに燃えたのか。ユダヤ人たちがパウロの側に行ってしまったら、今まで自分たちが教え

てきたことはなんだったのかということになる。プライドが大いに傷つきます。そればかりではない。人がいなくなれば飯の食い上げとなって、生活できなくなる。何が真実であるかとか、何を信じるべきかが問題なのではなく、お金とプライドが問題なのです。

2) 扇動して追い出した

それでも最初は、パウロたちへの迫害運動はそれほど大きくなかったのですが、やがて異邦人たちも救われていくと、それに比例するように迫害運動はどんどん激しくなります。とうとう「神を敬う貴婦人たちや、町のおもだった人たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、二人をその地方から追い出し」てしまいます。アンティオキアは、地理的に交通の要衝にあったことから貿易が大変栄えていて、高い地位にある人たちや富裕層の人たちが大勢いました。どこでもそうですが、町ではそんな人たちが大きな力を持っています。もちろん彼らの多くはユダヤ人ではない。ユダヤ人たちはそんな人たちをけしにかけて、パウロとバルナバを町にいられないようにしていった。おそらくこんなことだったのでしょう。この二人は恐ろしいことを言い広めて民衆を惑わしている。このまま放っておいたら町の秩序は乱れ暴動が起き、みなさんの既得権益、財産は失われてしまう。早く追い出さないと大変なことになる。おそらくそんなことを言って扇動した。

昔は正しい情報を手に入れる手段が限られていたので、人々は惑わされやすかったのだ。そんなふうに説明する方もいますが、それは間違いです。情報が発達した今も同じです。SNSやネットをとおして、嘘やデマ、真実でないことが飛び交って、いろいろな問題が起きています。能登で地震は大雨の災害が起きたとき、嘘の情報がネットに流れてのちに関わるような混乱が起きたそうです。どうしてそんな嘘をつくのか。SNSで注目されて沢山人たちに読んでもらうとそれに応じてお金が入るシステムになっている。なので人目を引くために嘘、偽りがエスカレートしていく。イザヤ書59章14節にあるとおりです。「こうして公正は退けられ、正義は遠く離れて立っている。それは、真理が広場でつまずき、正直さが中に入ることもできないからだ。」

3 異邦人たちの方へ

1) 神の計画

パウロたちは、聖霊によって教会から送り出されてきました。決して人間の計画とか熱心で始まったのではない。神のご計画としてこの伝道旅行が始まりました。であれば神の守りがあるはずです。二人が行く先々で神のことばを聞いて信じて次々と救われ、順調に伝道が進んでいく、と思いたくなります。ところがそうはならなかった。パウロたちの前に強力な反対者が現れ、志半ばで石を投げられるようにして町から追い出されていく。これだけ神さまのために一生懸命働いてきたのに、その報酬は、ねたみ、ののしり、迫害、「あいつらは泥棒、裏切り者、ペテン師」というような嘘偽りデマです。なにもいいことがなかったとは言いません。確かに救われる人は起こされた。でも、これはあまりにもひどすぎる。こんな目に遭わうのだったら、やる気をなくしてしまいそうです。

2) 喜びと聖霊に満たされていた

ところが52節にこうある。「弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」「弟子たち」とは、パウロとバルナバだけでなく、アンティオキアで救われたユダヤ人異邦人のことも含んでいます。自分たちを救いに導いてくれたパウロとバルナバが町にいらなくなり、イコニオンに追放されたと聞けば、普通はどう思いますか。パウロたちから教えてもらいたかったのにそれができなくなるので悲しむのは当然として、今度は自分たちも迫害されるかもしれない。そういう不安を感じてもおかしくない。ところが、喜びと聖霊に満たされていた、とある。どうして喜ぶことができたのか。このことから私たちはいくつかのことを学ぶことができます。

今回の伝道旅行は聖霊の働きによって始まりました。そこで多くの人たちが救われましたが、いっぽうで厳しい迫害もありました。聖霊の働きならばなにも問題が起らない、のではない。人が救われることと迫害、あるいは試練、この二つがセットで起こることがある。

それだけ聞けばがっかりしますが、そうではない。神の計画は底知れない。パウロがたちが迫害された結果、どうなりましたか。46節後半から47節。「ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』」

二重かぎ括弧の所はイザヤ書からの引用です。パウロは仕方なく異邦人のところに行くのではな

い。すでに旧約聖書で約束された、異邦人も救われるという神のご計画を果たすために積極的に行こうとした。そうしたら何が起きたか。48節。「異邦人たちはこれを聞いて喜び、主のこトばを賛美した。そして、永遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな、信仰に入った。」パウロたちが迫害されて追い出された結果、異邦人も神の救いに入れられるという大切な真理が明らかになった。神は、人の目には悲しいと思えることでも、喜びに変えてくださる。それがわかったので、聖霊に満たされて喜ぶことができました。

3) 神の恵みにとどまる

会堂で福音を聞いたユダヤ人たちが、自分はキリスト者となるべきかどうかと迷っていたとき、パウロは「神の恵みにとどまりなさい」と勧めました。神の恵みとは何か、ひとことと言えるものではありませんが、でも今日はその中から一つだけ強調しておきたい。神を信じたので問題がなくなるというのではない。いやむしろ大きな問題が起きるかもしれない。でも問題が起きたとしても、神はそれを益としてくださって私たちの思いをはるかに超えた恵みに変えてくださる。一般の人なら悲しみしか見えないときに、私たちは悲しみを喜びに変えてくださる神のみわざを聖霊によって目が開かれて見ることができる。これが神の恵みです。こんな恵みがほかにあるだろうか。いや、ない。だからここにとどまる。

試練のときにあっても、これを必ず恵みに変えてくださると信じて、神の恵みにとどまる者でありたいと願います。